

仮設暮らしで培った豊かなコモンのある暮らし

仮設暮らしは狭いが、なぜか豊かなコモンが生まれている。そこで見つけた古くて新しいまちのあり方とは

●持ち寄りの共助 ～自分にできることをしよう

みんなで自分にできることを持ち寄って助け合おう、ということです。今、仮設での暮らしの中に築かれた「持ち寄りの共助」の関係を町が復興した後でも継続していくことが重要です。

行政の手の届かないところはどうやってもあります。そこを、まずは町民が・地域が「持ち寄りの共助」でカバーし、それを行政がサポートしていく。未来の南三陸町のためにも、復興を通して町民・地域・行政・専門家などのあらたな協働のかたちが培われていってほしいと思います。

●「集会所はいつもオープン」「地域がつながる」

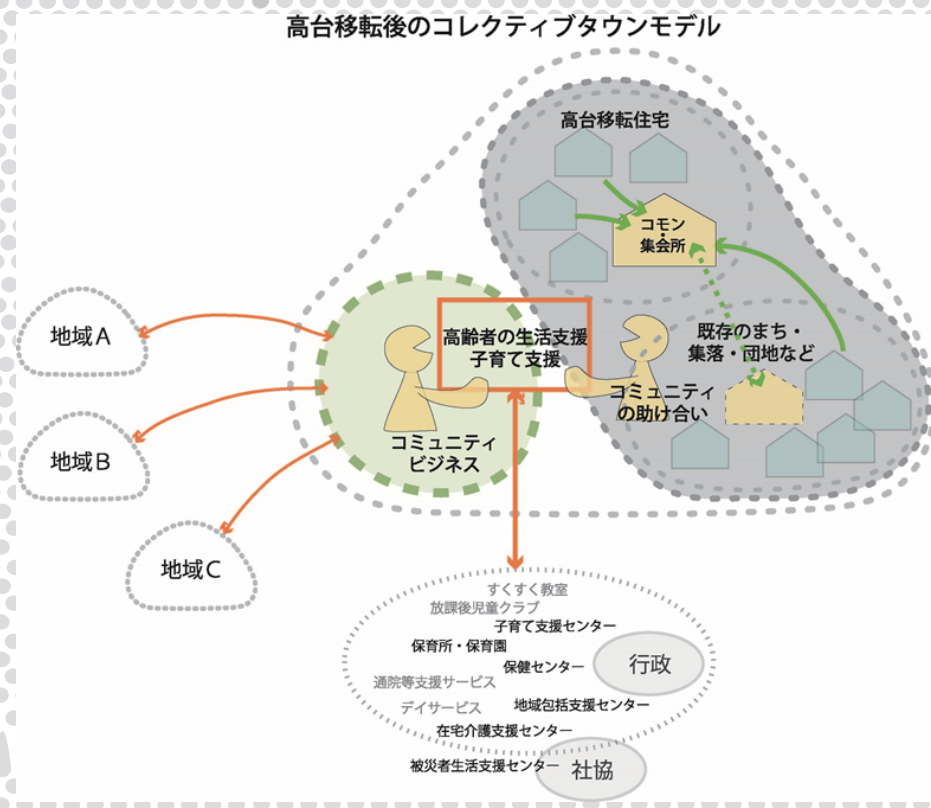
仮設の集会所は、いつもオープンでにぎやか。いくつもの違った集まりが居心地のよさそうな位置に散在してそれぞれの活動をしながらお茶をしたり、時に深刻な話をしたり。多世代が交わる場が生まれていることが、あたたかい賑わいともなっています。

●コモンはいつも進行形

コモンはたえず進行形で、豊かさを創生していきます。狭い我が家ながらも路地で生まれる会話に豊かさを感じ、コモンでの気兼ねない楽しみを共有する。こんな距離感は初めての体験だという方もいます。一緒におしゃべりを楽しんで感じるのは、今の経験が復興まちづくりの向かう方向を示しているのでは、ということです。いや、もしかしたら、かつての南三陸町のなかにあった豊かな人と人の関係、地域の底力かもしれない。"コモン"は日常の人と人、人と自然のなかで、共有したり、共同したり、共助したりする活動や場とも言えます。

具体的な構想案

公的な支援だけでは人々ニーズに応えきれない場合がたくさんあります。そんなときに顔の見える関係の中でコミュニティの助け合いがあると同時に、若い人たちも仕事として関わる事で活性化するように、配食サービスや買い物支援、子どもの預かりなどの日常生活のサービスを、小回りの効くサポート体制でコミュニティビジネスとして持続させていき、地域も活性化していくような地域立脚型の新たな共助のあり方を提案します。



発行日: 2014年3月27日
発行: NPO法人コレクティブハウジング社(CHC)
〒171-0031 東京都豊島区目白3-4-5
アビタメジロ302
電話: 03-5906-5340 / メール: info@chc.or.jp
執筆・編集
[CHC南三陸町支援チーム]
大橋徹平、狩野三枝、川上英里、マールン・ゴツィック、渡邊喜代美
[協力] 塩崎由人、色田彩恵

■CHCでは、以下の助成金によりこの活動を推進しています。

平成25年度 独立行政法人 福祉医療機構助成 社会福祉振興助成事業
助成事業名: 復興へのまち・コミュニティ創再生支援事業



このニュースレターでは、
様々な仮設住宅やまちで南三陸町の方々が取り組まれている
元気の出る活動を紹介し、
これからの暮らしづくり・まちづくりに向けて、
皆さんがこのまちで大切にしていきたいと思っていることを
私たちなりに発見し、綴りたいと思っています。

発行元: NPO 法人コレクティブハウジング社(略称: CHC)

みんなが豊かに暮らすために

老いも若きもつながる場と暮らす人が力を発揮できる仕組みづくりを!

1. 志津川地区のまちづくりの全体像と西地区の高台住宅地

志津川地区の概要を見ると、東、中央にはそれぞれ公的な施設が配置されている。しかし西地区においては計画が後発であったことも合わせ、公的な施設が皆無です。大きな計画のフレームで言えば、その3つのエリアは既に計画されている被災したエリアを通らないで山間を結ぶ道路計画は必須です。その上で、西地区における生活環境について考えてきました。

まちづくりに関しては、高台移転のまちづくりは、公園部会の方々の言う「森・里・海」連携プロジェクトにもつながりながら、豊かなまちづくりになっていくように住民全体で共有していきたいことです。

2. 西地区のコモンのあり方について

西地区については、そのエリアに住みたい人のニーズにそって公営住宅の建設が計画されています。しかし、それ以外は生活上の公共施設がないこともあり、地域の人々が集まる場、助け合うための場がありません。一般的には集会所や公民館が今でも町の中にあつた共有の場ではありましたが、ここでの場合は運営についてまで考える場(コモン)とすることが重要だと捉えています。それは、これまでの避難所、仮設住宅暮らしのなかで、十分とは言えないまでも助け合い、コミュニティが再生されるように努力した結果から自信を持って言えることです。

そういう視点で西地区を見ると、西地区でもそこでこれから暮らしていく住民で、コミュニティを再生するためのコモンについて議論をしながらまちづくりを進めていきたいと思っています。地理的な条件で西地区が2カ所に分散配置されたこともあり、そこにそれぞれ災害公営住宅が張り付くというニーズに配慮した計画はとても良い進展だと理解していますが、単純に集合住宅を建てるのではなく、その地域のコモン空間として十分活用できるような計画であるべきです。

仮設の中で孤立したまま亡くなられていく方や、高齢期を不安な思いで過ごしている方々が沢山いる中、集会所は、単なる公営住宅の集会所ではなく、集落全体が活用できる地域に開放されたものが望まれています。また、子育て世代や若い人たち自身も、共助を望んでいます。そういった共助のありようも含め、公営住宅の居住者のみならず、地域の人々と共に運営することで地域コミュニティが継続していくためのコモンたり得る集会所の計画については、集落の人々・使う人が参加していくこと、そしてその中から人が育っていくことが重要だと考えます。

これは、西地区A工区、B工区共通の課題です。近い将来は旭が丘団地や志津川高校、被災を免れた既存集落までを含むコミュニティ形成が望まれるでしょう。それは、中央地区、東地区にも共通する話題だと思います。

H24年度9月7日の「南三陸町の地域性を重んじた、災害復興公営住宅のコミュニティ醸造様式への陳情書」でお伝えしているとおり、南三陸町の地域性を重んじた形を創出していくために力を惜しみません。

南三陸町に生きていく 私らしい・私たちらしい暮らし・住まいを求めて

「コレクティブハウス」という言葉を初めて聞いたのが2011年の秋から冬でした。

はじめは???でしたが、説明を聞いているうちに!!!に変わりました。

私は小さな仮設住宅の自治会長という名の雑用係をやらせていただいております。

大震災後、半年間の避難所生活を経て地域のコミュニティを何とかより良いものにするべく当時の区長さんの計らいで現在の仮設住宅に移り住んだのでした。

都会のコレクティブハウスの暮らし方を学んだのですが、南三陸町という小さな田舎町とはちょっと違った暮らし方に思いましたが根本的には私たちが望んでいる暮らし方ではないか?と感じました。

何のことはない、助け合いながら自立し合いながら大きな家族のような暮らし方です。

普通に挨拶を交わし何気なく様子を伺い自分が出来る範囲の地域のための仕事をする。

時には大勢で飲食を共にし、親睦を深める。つかず離れずの程よい距離を保ちつつ、困っている方の様子を見守る。そんな温かい暮らし方です。

そうです。昔からの当たり前の南三陸町での暮らし方と言っても良いのではないのでしょうか？

あいにく、大震災によってもともののコミュニティが破壊されました。避難所生活も仮設住宅での暮らしもバラバラだった他人同士の集まりです。安心して暮らせる訳がないのです。あらゆる不安材料が溢れているのですから・・・

他人のことよりもまず自分の生活の立て直しで精いっぱい。当たり前です。

気持ちにゆとりのない時代は全国からたくさんの支援の手が差し伸べられました。

時間の経過とともに支援活動も縮小、撤退の時期を迎えてきます。

仮設住宅の暮らしも2年から3年程度だろうと安易に考えていましたが、どうやらこの後も数年は続きそうです。せっかくいい関係になりつつある仮設住宅での暮らしもまた泣く泣くそれぞれの移転先に行かなければならず、またバラバラです。

またコミュニティの作り直し。すべての人が何度も様変わりする暮らしの変化に適応できるわけではないのに・・・せめて、終の棲家となる高台に行ったら安心して暮らせる環境がなくてはならない。と考えるのでした。



高台での生活を夢見ながら町づくりの会議に参加するも、現実の頭の固すぎるルールによって夢も希望もない寂しい不便な生活が待っているのではないか?と思う瞬間が多々ありました。狭い住まいばかりを作っても仕方がない。そこに住む人々の豊かに暮らせる仕掛けが必要なのに・・・と焦りを感じ訴えてきましたが、その意見をなかなか取り入れてもらえていないのが現実です。

今回、未来のある学生たちと一緒に勝手に町づくりの意見交換をし、どのような暮らし方が良いのか?昔からの暮らし方と照らし合わせてコレクティブ的な暮らし方を学ぶ機会がありました。意見交換だけではなくイメージがわからないというもあり、年明けに東京のコレクティブハウスの見学、体験に行ってきました。

ハウスは20世帯の二階建ての小さなマンションのようなRCの建物でした。

そこで暮らす方々はというと、様々な单身の方から若いご夫婦、お子さんがいらっしゃるご家族まで多世代で構成されていました。

それぞれの住まいのプライベートは確保されつつも共有スペースもたくさん整備しており、それぞれの役割分担もしっかり話し合われて自分の為、そこに住んでいる人の為にたくさんの工夫がされておりました。

やはり、定期的と一緒にご飯を食べるというのが大切なのです。自分たちの暮らしを豊かにするために、とことん話し合い、自分の役割を把握し、住民同士助け合う。という暮らし方。規模が小さくても大きくても田舎でも都会でも人と人とのつながりがある豊かな暮らし方なのだと思います。

子ども達の感想も様々ですが、このような暮らし方が良い!とほとんどの参加者が感想を語りました。

今回お邪魔した聖蹟のコレクティブハウスの形も素敵です。こんな建物が欲しい!とすら思いました。

しかし、私たちが暮らすのはもっと問題は複雑です。このような建物だけでは解決するわけではないと素人でもわかります。このようなコレクティブな要素を取り入れた暮らし方を住民の方々と分かりやすい勉強会をし、その土地土地にあった助け合いの形を探って誰もが集まれる良い環境のものを高台に持っていかなければならないと思いました。高台の集会所に、災害公営住宅の一角に、そこに住む人が上手く運営できるように、その周辺地域の交流の場所としていいしくみを作っていかなければ終の棲家は安心安全な暮らしとは言えないのではないのでしょうか？

そのような暮らし方を望んでいる方もたくさんおられます。その暮らし方を微力でも支えたいと思っていらっしゃる方もたくさんおられます。なかなか地域住民だけでは運用が難しいのではないか?という思いもありますが行政だけにそのような運営をしてほしいわけではありません。地域住民の力を借りながら住民と行政が助け合いながら安心できる暮らし方を実現するのが復興につながるのだと思います。

(田尻畑仮設住宅自治会長 内海明美)